

第6回 タカの渡り全国集会 2005 in 福山

- 1 日時 2005年12月3日(土)～4日(日)
- 2 会場 広島県福山市沼隈町中山南26-1
「みろくの里 本館」
- 3 主催 広島タカの渡り研究会
- 4 後援 ・タカの渡り全国ネットワーク
・日本野鳥の会広島県支部
・環境省中国四国地方環境事務所
・広島県 ・福山市



5 内容

(1) メインテーマ 逆走するハイタカ属

① 基調演説

「韓国の鳥類と鳥類移動研究の現況」 朴 眞永博士 (韓国国立環境科学院)

○ 韓国鳥類の現況

韓国は、渡り鳥たちの繁殖地、越冬地、中継地として東アジアで最も重要な国であり、現在約470種(注1)が記録されている。そのうち約60種が留鳥で、それ以外の鳥は韓国を繁殖地、越冬地、中継地として利用している鳥である。この数字は韓国国土の面積に比較すると多く、このことは韓国が地理的に、移動性渡り鳥の経路上で重要な位置を占めていることを示している。

○ 韓国の絶滅危惧種の現況

韓国で生殖する鳥類のうち40種がIUCNのRedlistに絶滅危惧種として分類されているがこのうち25種(63%)が依存している種であり、これ以外に一生のうち一定期間湿地に依存している種を含めるとその割合はさらに高くなる。この割合はアジアでは20%、世界平均値の10%に比べるとかなり高い。このように湿地依存性の鳥類の比率が高いのは、高度に進んだ産業化と、高い人口密度によって湿地破壊や質の低下が、世界のどの地域より進んできたことを意味している。このような傾向はより深刻な絶滅の危機に陥っている鳥類の場合、100%が水鳥であることを見ても分かる。



○ 鳥類移動経路研究

韓国の鳥類移動経路の研究は1960-70年代にはキョンヒ大学の附属施設「韓国鳥類研究所」で活発に行われ、数十万羽の鳥にリングを装着させた。その後長い間この研究は中断されていたが、1993年に「林業研究院野生動物科」で再開された。

その後政府組織改変により「林業研究院野生動物科」の研究者たちがそのまま「国立環境科学院」へ移動し研究を続けているが、渡り鳥にリングを装着することは活発ではなかった。しかし、05年10月環境部の支援で、韓半島西南の離島紅島に「渡り鳥移動経路研究センター」を開設し、本格的に渡り鳥移動経路研究を始めた。また環境部は渡り鳥の研究を図るため、渡り鳥移動研究センターを追加設置する計画を推進している。(注2)

今までの研究を通じて日韓両国間を移動することが確認された種は下記のようなものがある。
 マナズル、ナベズル、クロツラヘラサギ、オオミズナギドリ、トウネン、ウミネコ
 オオセグロカモメ、ズグロカモメ、コヨシキリ、ミヤマホオジロ、オオジュリン など

○韓国と日本の鳥類の違いについて

韓国と日本は地理的には近いが、生息する鳥類には面白い違いがある。例えば日本では冬鳥のジョウビタキやミヤマホオジロは、韓国ではダルマエナガとともに全国的に良く見られる留鳥である。夏鳥ではシロハラとホオジロハクセキレイが全国的に良く見られ、一部は留鳥として四季生息している。また、マミジロキビタキ、ヤマショウビン、アカハラダカ、コウライウグイスなども全国的に良く見られる。このように距離的に近い両国の間に鳥類に分布差があるのは興味深いことである。

以前はセグロセキレイは日本にしかいないとされていた。しかし、ここ15年間の調査結果、韓国の西海岸地域を除く全国の河川で、局地的に容易に見られる留鳥であることが明らかになった。このことは過去に比べ探鳥人口が増加し、調査地域が大きく拡大されたことが原因ではないかと思う。

○渡り鳥保護の必要性

韓国には国際的に絶滅の危機にさらされている多くの野鳥が飛来している。そのため韓国で生息地と渡り鳥の保護が効果的に行われないと、渡り鳥たちは減少し、一部は絶滅の危機に瀕することになる。

現在韓国では渡り鳥の保護活動が量的、質的に過去に比べ大きく変化している。(注3) 今後渡り鳥を保護するための具体的なシステムの構築、支援、一般の関心と愛情が持続されるとその効果は大きなものになるだろう。

渡り鳥を保護することは、同じ地域で生息している他の生物も保護することを意味している。その過程を通して多様な生態系を健全に保護することは、結局私たち人類の生存基盤を健全な姿で保護することになるだろう。

注1：韓国は現在、紅島や黒山島に鳥類研究センターを設置するなど、鳥類研究に力を入れている。一方で観察者の数も徐々に増え、それに伴って鳥類の記録種数も増えて現在は500種を越えているようである。

注2：すでに、紅島の東25kmの黒山島に設置されている。

注3：韓国では例えばセマングンの埋め立て問題のように、日本と同じように開発と保護の問題を抱えている。その一方で2月には20万とも40万とも言われるトモエガモの増確保のため錦江を前面立ち入り禁止し、餌場として近郊の田園を国庫で借り上げている。

(要約および注は河原)

② 「ハイタカ・渡りの謎」 井上 勝巳（広島タカの渡り研究会）

- 1991年4月11日に愛媛県佐田岬にて、140羽のハイタカの渡りを観察。今までの渡りとは違い東から西へ向けて渡る。
- 1993年3月9日～4月13日まで佐田岬の先端部で調査を行いハイタカ属 2086羽が東から西へ渡ることを確認。10時～15時に集中し、ほとんどがハイタカである。
- 四国や九州、中国地方などの西日本で観察されるハイタカは、繁殖している大陸から越冬のために日本に渡来する「冬鳥」と推測することができる。
- 佐田岬では10月～11月にかけてハイタカが西から東へ移動する渡りが記録された。これは秋期に朝鮮半島を南下し長崎県対馬を経由する可能性があり、調査を行った。
- 対馬市巖原町（対馬の南端部）で2001年10月29日から11月4日まで調査を行い、南方向の会場へ渡るハイタカを記録した。2003年の調査でも南下するハイタカが記録され、また、同年の対馬北部の調査では侵入してくる個体も確認し、対馬がハイタカの主要な渡り経路の一つであることが確認できた。



③ 「春期の角島におけるハイタカ属の渡り」 山田 一太（広島タカの渡り研究会）

- 角島におけるタカの渡り調査は、2001年11月に完成した角島大橋により、簡単に島に渡れることから、2002年から本格的に取り組み今日に至っている。
- 調査地点の西北西210km先は韓国釜山、西140km先は対馬、南西120km先は壱岐が位置。
- 春期の渡り調査は、主として3月上旬から4月中旬の間に行った。
- 調査した結果、ハイタカ属は、ハイタカ、ツミ、オオタカの3種であった。
- 渡りの時間帯の中では、日の出前後から9時までの短時間に渡りが集中し、渡り総個体数の80%前後に該当した。その後、渡りは14時過ぎまでみられた。
- 角島の渡りが集中する時間帯は、立石山の記録（伊関文隆2004）より2時間程度、佐田岬の記録（井上勝巳1993）より4時間程度早い結果であった。
- 角島のハイタカ属の渡りピークが早い時間帯にみられる要因としては、海上を渡る飛行距離が長いことが考えられた。
- 飛去方向は、95%が西北西から西の範囲内であったことから、角島を通過した後のハイタカ属の多くは、韓国南部か対馬を目指して渡るものと推察できた。



④「春のハイタカの渡り・立石山の記録と北部九州の経路の推測」

伊関 文隆（日本野鳥の会福岡支部）

- 福岡県西部の糸島半島の西端に位置する立石山という山において、2002年から2005年まで調査を行い、主にハイタカの渡りを観察した。
- ピークは3月下旬から4月上旬であると考えられ、全体の5～7割程度の個体をカウントすることができそうであった。
- 年齢別にみると、最も年齢を識別できた（68%）2003年の結果では、期間の前半は成鳥の比率が高く、後半になるにつれて幼鳥の比率が増えていった。
- 時間別にみると、個体数の多い日では午前10、11時台がピークとなっていた。
- 2005年のシーズンは例年の1.6倍の約2500羽のハイタカが渡り、4月9日に、1日で過去最高の427羽がカウントされた。
- 各地で越冬したハイタカの一部は、本州または四国を西へ渡り九州北部へ上陸し、それらの個体と九州南部で越冬したものが、九州北西部へ集まって、一部は対馬を経由しながら、北西の韓半島に渡ってゆくものと考えている。



⑤「徳島県のハイタカ属の渡り」 臼井 恒夫（野鳥の会徳島県支部）

- 1991年から鳴門公園鳴門山を定点として、主にサシバ・ハチクマを中心に観察を実施してきたが、1992年にシーズンの後半に東へ飛去するハイタカ類が記録されている。
- 2000年秋に期間を延長して調査を行ったところ、ノスリとともに無視できない数のハイタカ属が渡ることが分かった。ハイタカ属に北東へ飛去するものが見られ、「逆行」で意識されるようになった。
- 秋のシーズンの逆行は4～500羽の渡りを確認しているが、春の渡りでは、60羽程度の逆行するハイタカが見られているに過ぎず、その理由は定できていない。
- 徳島県のハイタカ属の渡りは、順行・逆行ともに鳴門山、蒲生田岬周辺で見られる。
- 徳島県のハイタカ属の渡りはハイタカが多く、ツミは見られるにしても少ない。
- 鳴門山における秋の逆行については、渡る個体数の年による変動が大きい。逆行は春の方が秋に比べ安定した数が観察されている。

⑥「大分県関における春期のタカ渡り」 渡会満寿夫（希少生物研究会）

- 大分県内における春期のハイタカ属の渡りに関しての記述は、1993年に関崎対岸の愛媛県佐田岬（井上1993）の記録を発表された年の1993年にさかのぼる事が出来るが、具体的な記録はない。その後、散発的な調査は行われているが、継続調査は行われてない。
- 希少生物研究会を中心とする有志数名にて2004年3月14日～5月1日までの28日間、2005年2月27日～5月9日までの53日間、大分県大分市関（旧佐賀関町）にて猛禽類の渡り継続調査を行い、以下のような結果を得た。

[ハイタカ]

2004年西へ1655羽・東へ9羽、2005年西へ2629羽・東へ7羽の渡りを確認。

[ツミ]

2004年西へ2羽・東へ221羽、2005年西へ4羽・東へ283羽の渡りを確認。

[オオタカ]

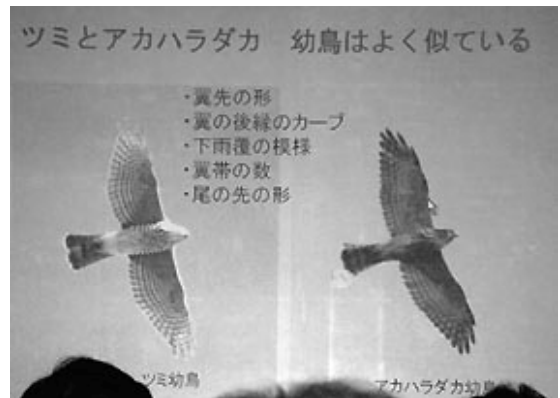
2004年西へ3羽・東へ74羽、2005年西へ7羽・東へ91羽の渡りを確認。

(色彩・翼形など明らかに国内で繁殖している亜種オオタカではない個体も多数観察され、亜種
チョウセンオオタカ等の可能性が考えられる。)

- ・ 2005年には総数5167羽の猛禽類をカウントし、当地が渡り鳥にとって重要な渡り経路であることが判明した。

⑦「ハイタカ属の識別」 久野 公啓（信州ワシタカ渡り調査研究グループ）

- ・ オオタカとハイタカ 頭の形に注目。
- ・ ハイタカよりオオタカの方が尾の先に丸みがある。
- ・ ハイタカはツミより尾が立派。
- ・ ハイタカの尾の長さの個体差
- ・ ツミとアカハラダカ雌雄、年齢による虹彩色の違い。
- ・ ハイタカとツミの顔の 패턴の違い。
- ・ ツミとハイタカ ツミは初列の翼帯が細かい
- ・ オオタカとハイタカの初列風切の 패턴の違い。
- ・ 難題！ハイタカ♂とツミ
- ・ ツミとアカハラダカ 幼鳥はよく似ている。
- ・ ツミとアカハラダカ この姿勢では識別できません。
- ・ 似てます。オオタカ幼鳥♂、ハイタカ幼鳥♀。
- ・ 上達のヒケツ：とにかくタカをたくさん見る。写真を見る。写真を撮る。いい道具を使う。識別を楽しむ。
- ・ ハイタカとオオタカ 翼角より先の部分の面積、形に微妙な違い。



※ ハイタカ属の識別について数多くの写真を元に識別講座を行っていただきました。しかしながらビデオテープの不具合にて、前半部分しか久野氏の話が残っていませんでした。よって一部のスライドの項目を掲載しましたのでご了承ください。

※ ハイタカ属の識別については、信州ワシタカ類渡り調査研究グループ著「タカの渡り観察ガイドブック」（文一総合出版）等をご覧ください。

(2) メインテーマ ハチクマの渡り

① 「韓国・紅島・黒山島におけるハチクマの渡り」 山田 一太(広島タカの渡り研究会)

- ・ 紅島と黒山島は韓国全羅南道新安郡黒山面に所属している。紅島は木浦から西に 115km, 同様に黒山島は 90km。紅島からは黄海を隔てて中国大陸まで約 300km。
- ・ タカ類の渡り調査は, 2005 年 9 月 29 日から 10 月 2 日までの 4 日間, 二つの島を移動しながら
- ・ 同行の日本鳥類標識協会の会員 6 名にも協力してもらい行った。
- ・ 調査した結果, 合計でハチクマは 298。一日あたりの最多記録としては, 10 月 2 日の 200 であった。この記録は一日としては過去最高記録となった。
- ・ ハチクマ以外には, ハイタカなど 6 種 325 ほど記録した。
- ・ ハチクマは紅島では南西ないし南方向に飛去。黒山島では東方向から飛来し北西ないし西方向に飛去。このことから, ハチクマは紅島を通過した後, 中国大陸に向かうものと推察された。
- ・ 紅島には, 2005 年度に韓国初の国立渡り鳥研究センター(職員 7 名)が設置された。ハチクマの渡りは以前から知られていた。春期にも周辺の島(小黒山島)では少数ではあるが, ハチクマの渡りは記録されている。
- ・ 今後, 展望の良好な地点を選んで観察を行えば, 渡りの記録数は増加すると考えられた。

② 「もう一つのハチクマの渡り」 山本 兆司 (広島タカの渡り研究会)

- ・ 大分県北部ルート ; 春期、九州北部を西から東へ移動するハチクマの渡り経路の途中に、大分県北部に位置する八面山があり、1995 年から調査開始。その結果、ハチクマの春の渡りの最盛期間はほぼ 5 月中旬、渡り期間中のハチクマの通過総個体数は 900 羽以上と判明。
- ・ 当ルートでは特定の時間帯に渡るという傾向はなく、いずれの時間帯も通過。
- ・ ただ、13:30 から 15:30 の時間帯での通過個体数が多く観察される。
- ・ 当ルートでの観察状況から、春期、ハチクマは朝鮮半島等から断続的に波状的、放射状的、あるいは同心円状的に、九州北西部から北東部、本州西部、日本海側全域にかけて飛来するものと予想され、渡りの日々の気象条件等の違いにより、飛来経路や時間帯、個体数が異なって観察されるものと考えられる。
- ・ 甌島列島ルート ; 秋期、愛媛県佐田岬半島から大分県関崎に西進して来るハチクマの九州内での行方について情報が無いことから、関崎からの流れが南西方向へ西進するのが自然と考え、その先の九州南西端に位置する甌島列島の下甌島にて 1999 年から調査開始。
- ・ 1999 年 10 月に初めてハチクマの渡りを確認。当地では、ハチクマの渡りがは 9 月下旬から 10 月中旬過ぎまで観察される。2003 年にはアルゴシステム利用によるハチクマの衛星追跡(樋口他)にて、ハチクマ幼鳥 1 羽が下甌島より東シナ海へ向けて飛去したことが判明、甌島列島からの西進が裏づけられた。
- ・ 当ルートでのハチクマの通過総個体数は数百と予見される。ハチクマの飛去時刻は 6:30 台から 15:30



台までわたって、特定の時間帯に飛び立つという傾向はない。また、早朝時刻に飛び立つ個体は前日からの滞在個体であり、午後からの飛び立ち個体は 10:30 以降に列島南端へ飛来する個体の中から見られる。

- ・ 渡り個体数に占める幼鳥の比率は、年齢判別できた個体数（40%）の内、87%であった。また、飛去できなかった当日の最終滞在個体の年齢判別結果についても同様の結果であった。
- ・ 飛去方向は西方向が主方向（40%）であり他は北西から南方向にわたり幅広く均等に渡った。
- ・ あるエピソード I ; 大分県北部ルート上の調査に関連して、福岡定点から大分定点までのハチクマの移動の追っ掛けをする機会を得た（2001年5月19日実施）。定点区間距離は90km。
- ・ 個体群の同定に確信はないが、福岡定点で捉えたハチクマ20+羽が大分定点に飛来した26羽について、先頭個体♂1で36km/h、最遅個体♂♀各1で22.5km/hの区間速度結果を得た。

③各地からの報告

○鳥取「山陰でハイタカの渡りを確認」 池田 兆一（日本野鳥の会鳥取県支部） 松本 靖介（日本野鳥の会鳥取県支部）

- ・ 2005年10月25日に島根半島の東端、地蔵碕（松江市美保関町）において、ハイタカとノスリの渡りを確認（発見）した。
- ・ 翌日（10/26）から地蔵碕で調査を行い、ハイタカやノスリが渡っていることが確認できた。（連続調査ではないものの、11月7日までハイタカが記録される。）
- ・ 地蔵碕付近でハイタカが樹木に止まる行動等を確認しており、地蔵碕は単なる経路地点ではなく、天候待ちや休息・栄養補給の地点として、渡りの重要な中継地であると考えられる。

○愛媛「高茂岬と由良半島のハチクマの渡り」 楠木 憲一（日本野鳥の会愛媛県支部）

- ・ 愛媛県南宇和郡愛南町の「高茂岬」と「由良半島」にて調査を行う。
- ・ 高茂岬のハチクマはサシバと同方向に渡るが、由良半島のハチクマはサシバと異なり西北西へ渡る。
- ・ 由良半島の通過群は飛行方位を修正していて、五島列島の大瀬崎を通過するのではないかと考えられる。

○長崎「長崎県を渡るアカハラダカとハチクマ」馬田 勝義（日本野鳥の会長崎県支部）

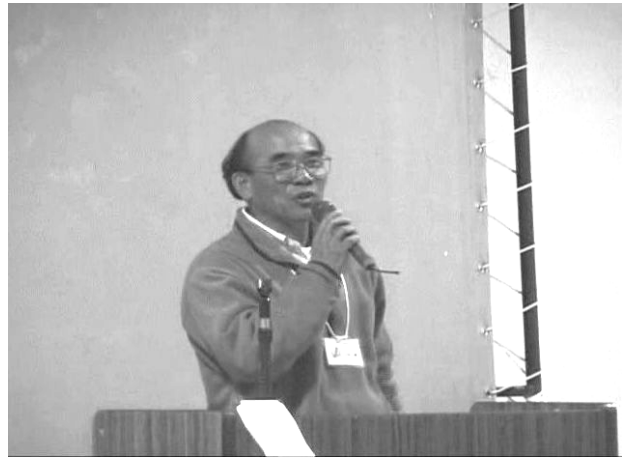
- ・ 対馬「内山峠」では、9月中旬～下旬にハチクマが例年50羽弱通過していく。
- ・ 対馬でのハチクマの渡る方向は、春は南下し秋は北上する。
- ・ 対馬を北上したハチクマは、韓半島の南側を通過して西へ渡っている可能性がある。

○高知「高知県のタカの渡り」 日本野鳥の会高知県支部有志

- ・ 主な観察地は、北山、虚空蔵山、鏡ダム、五大山、岡豊山（南国市）などである。
- ・ 渡りの傾向として、春は北部を通過する個体が多く、北山等で観察している。
- ・ 秋の渡りでは、高知市内を通過する個体も多く、五台山や虚空蔵山などで観察している。
- ・ 今までの観察報告から、秋の渡りに於いては鳴門を通過したサシバの一部は、早明浦ダム付近を経由して、由良半島へ西進するのではないかと考えている（西村、橋本）

④「オオタカの亜種と年齢について」 川田 隆 (バードコーディネーター)

- ・ オオタカは日本全国に棲息しており、本州中部以北では普通種である。レッド・データ・ブックに絶滅危惧種として掲載されているために、開発に伴う環境アセスメントの対象種となり、多くの調査がされている。しかし、亜種や年齢の知識が乏しいために、正確な調査分析が十分に行われていないのが現状である。
- ・ オオタカは7～10亜種に現在分類されている。北アメリカ産の3亜種は形態的にも異なるため、別種として扱われることも近年多くなっている。日本で記録のある亜種は3亜種で、繁殖している個体群は2亜種である。北海道はチョウセンオオタカ *Accipiter gentilis schvedowi*、本州以南はオオタカ A、g、fujiyamae と言われている。成鳥の識別は、野外で判定することは難しいと思われる。しかし、幼鳥においては次の2つの相違点がある。①体下面の地色が白か白味を帯びた淡茶色で、襟の部分の淡色部に白味を帯びる。②体下面にある縦斑の色が濃くて且つ太く、脇ではハート型を成すことが多い。
- ・ 稀な冬鳥として飛来するシロオオタカ A、g、albidus は、淡色形は成鳥、幼鳥共に一目瞭然と解る。
- ・ オオタカは幼鳥と成鳥では体色変化が大きく、鷹匠の世界では3回換羽して完成成鳥の羽色に成ると言われている。幾つかの点に注目すると、何回目の換羽をしたかで類推することが可能となった。
- ・ **1年目秋**
雄雌共に全体が褐色及び薄い茶色で、体下面に細い縦斑がある。
- ・ **2年目秋**
♂の背面は青褐色で、黒褐色の眼帯が目立つ。体下面の黒褐色横斑は太く、下雨覆全域に波状模様がある。初列風切羽、次列風切羽、外側尾羽共に鷹斑が明確にある。♀の背面は褐色で、眼帯も褐色を帯びる。体下面の褐色横斑は太く、下雨覆の全域に波状模様がある。初列風切羽、次列風切羽、外側尾羽共に鷹斑が明確にある。
- ・ **3年目秋**
♂の背面は暗青灰色で、黒い眼帯が目立つ。体下面の黒い横斑は細く、下雨覆の中心部の斑状模様が薄くなるか消失している。初列風切羽の鷹斑は明確にあり、次列風切羽の鷹斑は薄くなるか消失している。外側尾羽の鷹斑は細く薄くなっている。♀の背面は灰褐色で、黒い眼帯が目立つ。体下面の黒い横斑は細く、下雨覆の波状模様は、中心部で薄くなる事もあるが明確である。初列風切羽の鷹斑は明確にあり、次列風切羽の鷹斑は薄くなっていることもあるが明確である。外側尾羽の鷹斑は細く薄くなっている。
- ・ **4年目秋 (成鳥)**
♂の背面は暗青灰色で、黒い眼帯が目立つ。体下面の黒い横斑は細く、上部では消失している個体もある。下雨覆の波状模様は消失しているか、外側だけに薄く残っている。初列風切羽の鷹斑は基部では消失しているか、薄くなっており、個体によっては完全に消失している。次列風切羽、外側尾羽の鷹斑は共に消失していることが多い。♀の背面は青灰色で、黒い眼帯が目立つ。体下面の横斑は細く、下雨覆の波状模様は消失しているか、外側だけに薄く残っている。初列風切羽の鷹斑は薄くなっている。次列風切羽、外側尾羽の鷹斑は共に消失していることが多い。
- ・ 以上は、完全に換羽が終了した個体に対して有効である。



⑤ 「ARRCN の活動と渡り調査の最近の成果」 新谷 保徳 (ARRCN 事務局)

- ・ ARRCN は 1999 年 8 月から活動を開始し、現在 25 カ国、148 人のメンバーがいる。2 年に 1 回、アジアの参加国を持ち回り方式で「アジア猛禽類シンポジウム」を開催している。
- ・ 現在 4 つのプロジェクトを実施。
- ・ ①アジアのタカ渡り調査 ②カザノワシの生態・分布調査
- ・ ③コウモリダカの生態・分布調査 ④クマタカ属 4 種の分布調査
- ・ アジア・タカ渡り共同調査

秋の渡りの概要

日本、タイ、マレーシア、インドネシア、ベトナム、台湾などで調査。

春の渡り概要

日本、台湾、ベトナム、タイ、インドネシア、マレーシアなどで調査。

- ・ アジアにおけるタカの渡り調査の課題

保護のために繁殖地、休息・採餌地、越冬地の解明と、それぞれの場所での生態の解明が不可欠。国、地域を越えた一層の協力体制の確立が必要。

継続的な調査体制の確立が必要。

地域によっては観察者が少ない (中国、フィリピン)。

経済的な理由で、十分な調査が観察体制がとれない地域があること。

⑥HMNJ 事務局連絡 熊崎 詔之 (タカの渡り全国ネットワーク事務局)

◇エキスカッション (12/4 13h より 笠岡干拓地にて探鳥)

第 6 回タカの渡り全国集会 2005 in 福山
ポスター



【 懇親会と恒例のオークション風景 12/3 18h ~ 】



夜の大懇親会



朴先生と懇親を深める



恒例の大騒ぎオークション！
売り手は「長崎県の馬田さん」